

研究環境基盤部会 大学共同利用機関改革に関する作業部会（第4回） ヒアリング資料**機関名 人間文化研究機構 国立民族学博物館****<主な論点>****① 検証の進め方（資料2-1）について**

・ 昨年の「第4期中期目標期間における大学共同利用機関の在り方に関する意見の整理に係る意見照会」の際にも述べたとおり、大学共同利用機関の活動につき、大学における学術研究の発展に資するものとなっているか等を定期的に検証し、そのあり方について再編・統合も含めた検討を行うことは必要と考える。

・ その検証にあたっては、大学共同利用機関の活動がきわめて多様であり、とくに人文科学系の研究機関における研究のあり方は、理系の研究機関のあり方とおおきく異なることに留意する必要がある。人文科学は、人間そのものと、人間の生きる世界についての不断の探究を求めるものであり、あらゆる学術的探求の基盤となるものである。それだけに、その評価・検証にあたって、経済的な効率性や短期的な即効性が安易に求められてはならない。評価・検証の指標の設定にあたっては、このことに十分留意する必要がある。

・ 国立民族学博物館では、実施している研究プロジェクトごとに、海外の研究者を含めた評価委員会による評価を毎年実施しているほか、機関全体としても毎年、自己点検報告書を作成したうえで、運営会議並びに外部評価委員会での評価を受け、事後の研究活動の展開に反映させてきている。

したがって、今回の検証にあたり「①自己検証：各大学共同利用機関及び各大学共同利用機関法人は、委員会など独自に体制を構築し、本ガイドラインに基づき、必要に応じ海外の研究機関に属する研究者等の意見を聴取しつつ自己検証を実施する。」と「②外部検証：科学技術・学術審議会が、検証結果報告書に基づき外部検証を実施する。」という手順を踏むことは妥当であると考えられる。

ただし、その「外部検証」の体制に関し、とくに本年度は、第3期中期目標・中期計画に関する独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による評価が実施されることとなっており、同「評価」と今回の「検証」の関係につき、内容、時期、作業に関し、重複が起これないように、あらかじめ明確な整理をおこない周知されることを希望する。

② 主な観点（資料2-2）について

それぞれの項目に関する「観点」については、当該項目の内容と照らし合わせて、おおむね妥当なものが列挙されていると考える。

ただし、最後のVI<社会との関わり>に関しては、当該研究機関から社会に対する一方的な発信のみが観点として提示されており、これまで各方面で指摘されてきている、研究の社会との「協働・共創」の視点が考慮されていない。少なくとも今ひとつの観点として、「○ 研究成果をひろく社会と共有し、社会との協働・共創を通じて、新たな研究の展開につなげるとともに、社会の諸活動の振興に寄与している。」という点を加える必要がある。

③ 指標例（資料2-2）について

- ・以下、指標例として示されたものが、有効と判断されるものは、あらためて記載していない。

I <運営面>

- ・挙げられた指標例は、妥当なものとする。

II <中核拠点性>

●当該機関の研究活動（館内研究、館外関連研究者の活動を含む）

- ・国内、国外での出版を問わず、単著（数）、共編著書（数）が、共著論文（数）以上に、有効な指標となる。
- ・引用数 TOP10%論文の数は、把握できない。

●機関の特性による指標例

- ・ミッションに掲げる文化人類学という世界全体を対象とする学問分野において、実際に世界全体をカバーする研究者の陣容と研究組織を具備していること。
- ・国内外の学会の本部を機関内に設置していること。
- ・国内外の学会の役員（会長等）の就任件数。
- ・国内外の学術研究雑誌の編集長・編集委員・編集顧問の就任件数。
- ・当該研究分野における科学研究費補助金の採択件数と配分金額。

Ⅲ<国際性>

- 国際的な研究活動の状況のうち、
 - ・欧文を含む外国語で書かれた単著（数）と、その受賞、国際学術誌での書評が、重要な指標となる。
 - ・国際共編著書（数）が、国際共著論文（数）以上に、有効な指標となる。
 - ・引用数 TOP10%論文の数は、把握できない。

- 国際的な研究者の在籍状況
 - ・国際学術研究雑誌の編集長・編集委員・編集顧問の就任件数。
 - ・機関に所属する研究者の国際学会への所属・参加状況

- 人材の多様性・流動性の状況
 - ・外国人研究員（外国人客員教員）の人数。在任期間、国籍。
 - ・指標例として記されている「女性研究者数」は、国際性の指標とはなりえない。

- 機関の特性による指標例
 - ・海外における国際共同展示の実施状況（事業数、対象国、展示点数、期間）
 - ・海外研究機関・研究者とのネットワークの構築状況
 - 独自に構築したネットワークの名称、対象国数、対象者数、継続期間。
 - 機関としての既存の国際的ネットワークへの参加状況
 - （件数、各名称、参加資格、参加国総数、参加機関総数、会員数）

Ⅳ<研究資源>

- 保有している施設、設備、資料、データベース等による共同利用・共同研究の状況
（当該機関に属さない関連研究者による利用回数 等）

以下は、いずれも機関の特性による指標例

- ・所蔵する標本資料総数、映像音響資料総数、文献図書総数、アーカイヴズ件数。
 - 標本資料の（展示用）貸出件数、点数。熟覧件数、点数。内大学による使用実績。
 - 映像音響資料（ビデオテープ番組等）の貸出件数、館内視聴件数。内大学による使用実績、同受講者数。
 - 文献資料の館内外貸出件数。内大学による使用実績。
 - アーカイヴズ資料の利用件数、点数。内大学による使用実績。
- ・データベースの総数、各データベースの格納件数、レコード件数、利用アクセス件数。
- ・「共同利用型科学分析室」の利用件数、処理点数

(保存科学の国際的中核研究拠点としての実績)

所有機器：X線透視 CT スキャン装置、三次元積層造型機 (3D プリンター)、三次元形状計測装置、バイロライザーガスクロマトグラフ質量分析装置、イオンクロマトグラフ質量分析装置、蛍光 X 線分析装置、恒温恒湿槽)

- ・「多機能燻蒸庫」「ウオーク・イン高低温処理庫」の利用実績
- ・「みんぱっく」(資料貸出用学習キット)の貸出件数。

V<新分野の創出>

●学際的・融合的領域における研究活動(館内研究、館外関連研究者の活動を含む)

- ・国内、国外での出版を問わず、単著(数)、共編著書(数)が、共著論文(数)以上に、有効な指標となる。
- ・引用数 TOP10%論文の数は、把握できない。
- ・分野横断的な研究分担者構成をもつ研究プロジェクトの内容と件数は重要な指標となる。

●機関の特性による指標例

- ・特許出願、特許査定の内容と件数。
- ・科学研究費助成事業の内、とくに新学術領域(研究領域提案型)、同(学術研究支援基盤形成)の採択件数、採択額。

VI<人材育成>

●機関の特性に応じた指標

- ・総合研究大学院大学の基盤機関としての、海外フィールドワーク学生派遣件数、人数。
- ・機関研究員(任期3年)の採用数。
- ・若手研究者養成を目的とした外来研究員の受け入れ件数。外来研究員の科学研究費補助金の採択件数。配分額。外来研究員の就職先。
- ・共同研究の若手特別枠による採択件数、研究者受け入れ数。
- ・他大学との単位互換制度、対象大学院数、対象科目数、受講者数。
- ・大学院学生を対象とした「若手研究舎奨励セミナー」の実施。参加者数。表彰者数。
- ・大学による博物館展示の授業利用。利用大学数、利用者数。
- ・展示場無料利用を主たる機能とする「キャンパスメンバーズ」登録大学数、利用者数。
- ・他大学を含む留学生による展示場利用ワークショップの開催件数。
- ・映像音響資料(ビデオテープ番組等)の授業利用件数、同受講者数。

Ⅶ＜社会とのかかわり＞

主な観点の追加

○ 研究成果をひろく社会と共有し、社会との協働・共創を通じて、新たな研究の展開につなげるとともに、社会の諸活動の振興に寄与している。

●機関の特性に応じた指標（とくに地域社会の振興への貢献）

- ・国内外の先住民コミュニティとの協働作業の内容と件数。
標本資料、映像音響資料のデータベースの共同構築、共同展示、研修・熟覧の受入れ。
- ・小学生・中学生・高校生（いずれも入館料無料）の団体利用件数、利用者数。
- ・地方自治体と連携した地域社会振興に関わる国内事業の内容と件数、参加者数。
- ・地方自治体等の主催する事業への、主催、共催、特別協力、後援等名義使用の協力件数。
- ・海外の地域社会振興に関わる国際協力事業の対象国・地域数、参加者数。
- ・大規模災害復興支援にかかわる事業数、内容、その利用者数。

④ 機能別分類（大型設備・データ・情報基盤）の観点（資料3別添）から、自己検証をする際に留意すべき点

- この3分類（大型設備・データ・情報基盤）の具体的内容についてご教示願いたい。

国立民族学博物館

世界最大級の博物館機能をもつ文化人類学・民族学の分野の大学共同利用機関

人類の文化と社会についての理解を深め、人類共生のための指針を示す

研究機能

文化人類学・民族学の世界的な研究・共同利用拠点

- 世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織
(専任教員52名) 単体の研究機関としては世界唯一
- 国際人類学民族学科学連合 (IUAES)の本部事務局
- シンポジウム等開催266回、参加者20,525名
内 国際シンポジウム 29回、参加者2,092名 (平成29年度)



博物館機能

研究資料の集積と、研究成果の公開の回路としての博物館

- 収蔵標本資料 約345,000点
20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションとして世界最大
- 世界最大の民族学博物館 (施設規模 延床面積 52,648㎡)
本館常設展示 10,938㎡ 展示数約12,000点
特別展示館 1,540㎡ 年間2回の特別展
(ほかに、企画展4回、巡回展等)



研究機能

文化人類学・民族学の世界的な研究・共同利用拠点

- 特別研究 (国際共同研究 2016~24年 1件3年 年次進行6件 8年計画)
「現代文明と人類の未来一環境・文化・人間」
環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティとの共生、人口問題等、
人類の抱える課題を分野を超えて多角的に検証し、未来への指針を探る
- 共同研究 (平成30年度)
一般27件 若手4件 館内58名 館外共同研究員396名
計454名
- 文化資源・情報プロジェクト (平成30年度)
19件 館内44名 館外共同研究員 館外69名
- 科学研究費助成事業による研究プロジェクト
総計82件 304,880,000円 (令和元年度)
館員代表・研究分担者110人、 館外研究分担者82人



博物館機能

研究資料の集積と、研究成果の公開の回路としての博物館

- フォーラムとしてのミュージアム
研究者、利用者、文化の担い手の3者の
協働作業の場としてのミュージアム
- フォーラム型情報ミュージアム
民博の所蔵する標本資料や映像音響資料の情報を、現地(ソース・
コミュニティ)の人びとと共有し、そのデータベースを人びとの記憶の
集合体として、将来に継承していく。
- 情報統合型メディア展示の構築
モノの展示と情報メディアを高次元で統合した展示の実現
・次世代電子ガイドと新ビデオテークシステムの連動
・インターネット及び可搬型ビデオテークによる展示の大学共同利用
・公募型メディア展示による大学博物館支援

